西土佐 山と川の物語

草木が水を吸うように
私たち人も同じ生命を
さずけられ同じように水を飲む。
生きていくために一つとも大切な
もののひとつが水。
その水をみがき、育てたくわえる
のが森。
天からまいおりた水のこどもが
ゆたかな森の土にしみこんで
ある日一滴のしずくとなり
あるところでは泉から こんこんと
わき出し、谷川を下りはるか長い長い
水の旅をはじめる。

みくまりちゃん　みくまるくん

水の惑星地球。
しかしその水のうち、飲めるのは
わずか1%たらず。
世界中では水不足が深刻。
あたりまえのような水のある日本は
何よりも大切な資源に恵まれている。

地球の水をお風呂一杯分
とすると、安心して飲めるのは
わずかスプーン一杯分しかない。

食害許さぬ!! シカレンジャー

森林率84%!! 日本一の森林県。
世界に誇る森の国だ!!
手入された人工林ぜいたかな
天然林に陰った雨はミネラルや
よう分をいっぱい、くみ栄養満点。
プランクトンや川魚を育て196km。
四万十川にゆたかな恵みをもたらす。
西土佐の森と川は日本一の
ゴールデンコンビだ!!

三本杭 1226m（滑床山）

古くは泉ヶ森と呼ばれていた
雪輪の滝の源流をなす山

黒尊 黒一帯の花崗岩に
含まれる鉄成分は川の
植物プランクトンを育む
鉄分の供給源。

生き物たちの
生命が天に
還る時、森の
空に虹が
かかるという

イノシシから農作物を守るぞ…イノレンジャー

ブナ林 四国の南限

かつて黒尊には森林鉄道が
通り、天然林の木材を
満載したトロッコを引い
て蒸気車が走っていた。

黒尊様は
雨乞いに効験
あらたかとして
旱害のひどい時は
各地からお神が
たくさんあった。

長雨には
日和申し。
旱害には雨乞い。
神事が部落単位
として分なれていた。
（敷南）

美林谷 962

古来は「大黒尊」と呼ばれ、黒々と
茂る原生林や雄大な山容や
弥陀野伝説もあわさって神聖な
山として信仰されていた。
禊川（はらいがわ）で身心を清めて
登ることだろう。
四国の1100m以上では最南端。

山財 1065m

山中には炭がま跡がいたる
ところに残っている。
西土佐で生産された良質の
炭は舟母で川を下り、江戸、大阪の
はこばれ都会の生活を支えた。
明治期、土佐の炭生産量は
全国のトップクラスだった。

黒尊

大瑞

大黒山 山頂近くに「弥陀野」とよばれる平地がある。
今は昔、ここには阿弥陀寺があり2mもの黄金の仏像が
寺宝として大切に祀られていた
ところが仏像の所有権をめぐり、伊予、土佐の間で
論争が起こり、ある時、ニワトリの鳴き声を合図に伊予は
植川より、土佐は奥屋内から、双方が駆け上り
先着した方が金の仏像を所有することになった。
伊予は前夜より寺の近くまで上り、朝一番のニワトリの
鳴き声とともに寺に至着して仏像を奪取した。
土佐は前夜、選出した屈強の若者に大鐘撞振で
士気をたかめて家につき、翌朝、駆け上がったときには
人影も仏像もなかった。
この話はほぼ実話であり、仏像は今なお植川の
少林寺に保存されている。

弥陀野

参考文献
西土佐村史

大黒山 1165m

出井越

奥屋内と出井横山を
結ぶ幹道があった。
幕政時代末期までは
出井横山は下山郷に
属し深い交流があった

下山山

2015.6.26

木治師
千年以上もの昔から
帝の「山川合以上伐次第」の
免状をもち全国の山々に
「ろくろ」をもって良質材を求め
椀を製作する人々がいた。
黒尊・双木にも木治師が
時の流れと隔絶した生活を
営んでいた。

森の中の雨
森の中に降る雨と林内雨と呼ぶ。
雨は幹を伝い樹幹流となって
森の土にしみこんでいく。霧が
葉、ばたにたまって森の中に降る樹雨（きさめ）
数ある雨の中でもっとも静かだ。

648
奥高野

天使の三角点

スリ ほいか坂

森は生き物の集合体

森は大きな木や小さな木
草やコケやキノコ、ドングリや種。
虫や鳥や動物、目には見え
ない菌やバクテリア、そして
土の中の生き物たち。
たくさんのいのちあるものたちが
それぞれの役目をもちながら
いのちをめぐらせながら、ずっと
とぎれることなく巡り循っている
かけがえのない生き物が
曼荼羅のように重層無尽に
つながっている。

往還道と番所

山坂を越え、谷をくぐり、障壁風斜で
一歩一歩あるく困難な道であった。
伊予との国境にあることから、内番所
境目番所と番所も多く厳しい
取締りがされていた。通行手形は
必携、不審者は召捕って奉行所へ
連行。禁制品は没収された。
他国者の通行は特に厳しく
地元人の伊予への一日通行も
目的を訊問されていた。
道はあっても自由な通行が
許されていなかった。

上山郷十川から椿谷を経て伊予吉野を結ぶ往還の
中継地として椿谷は大いに栄え、宿屋、酒屋、蝋屋
製紙業者、茶屋などが軒を連らね、戸数は目に
のぼっていた。江戸後期～文政初期がピーク。
（十川～吉野線、五里半。約22km）

一瞬のうちに流れる水
何万年も動かない山
動と静。
山と川の物語

縄文時代より人が住み、夏季は広瀬に居住して
四万十川の魚を漁り、冬季には二ツ山を越え
南側の篠川に入り、猪、鹿、熊、鳥などを
獲って生活していたと考えられている。

西土佐の木 ヒメシャラ

明治時代、粉村は
全国養民の参監として
預えられていた

四万十川がもっと
豊かだった時代には
川漁師もたくさんいた

植物は鳥のふんなかを
かりて子孫を遠くまで
はこび繁殖する。
サカキの種は鳥のおなかを
通らなければ発芽できない

藩政時代には
各村で結びすき
がさかんに行なわれ
重要な生産物だった

1958年 江川崎村と津大村が合併し
西土佐村が誕生した。
2005年 中村市と合併し四万十市になる

縄文時代の石斧や黒曜石の
石器片が出土している
堂ヶ市遺跡（営林署住宅跡）

西土佐の鳥 カワセミ

源平の戦に敗れ安住の地を
求めて彷徨っていた平家
落人の森・遠地の両族に
よって藤川の開拓が
はじまった。

森や川に生きるものは
私たち人間と同胞だ

西土佐 郷土の森
森の巨人 自選
大ヒノキ

堂ヶ森 857m

毎年5月5日は山頂で
大祭が執り行なわれ、山の安全、五穀
豊穣、子どもの成長
などを祈願する。

舟母

長さ13m、巾2.1m、八反の大きな帆をもつ舟。
下りは櫂でこぎ、上りは一人が綱で引き
一人が櫂さしで進めていた。
川崎～上田間を普通は三日間で往復。
夕方が夫妻で運行。夜は宮ですごす。
二人だけの時間があり、収入もよかった。
昭和初年には村内17舟舟あり
たくさんの炭などの林産物を運んだ。
順風を白帆いっぱいに受け
川面を航行する姿は美し
かったことだろう。人と川の関係が
より濃く豊かな時代だった。
昭和30年代トラックにかわり姿を消す。

名物 女相撲

1994年までは「渡川」と呼ばれていた。
1964年の河川法制定時には正式名称
「渡川水系渡川」。
水系とは同じ流域内にある本川、支川
派川、湖沼をまとめたもの。
現在は「渡川水系四万十川」が正式名称。
「四万十川」名の由来には多くの説があり
・構原の四万川と十和の十川を合わせたもの
・アイヌ語の「シ・マムタ」（とても美しい）説。
・四万石の木材を10回流すことができる説。
（木を伐採し、川流しで搬送する際に
「何万石の木材を何回流せるかを示す
単位として「何万何川」という数え方が
あったという）
・また、1700年代には「四万十川」と書いて
「あたりがわ」と読まれていたこともある。
・外にも「四十里の中に400の谷がある」説
・川の中州に神様を祀っていたので、島に渡ることを
「島渡り」が「しまとがわ」になった説
・中村市下流域では「四万渡り」とのんでいた説。
いずれも古い流れと時間の間に真相は
定かではない。

8月11日は『山の日』

山に親しみ山の恩恵に
感謝する「山の日」が
2016年から祝日と
なる。
昔から「山」といえば
「川」と答えるのが
あいことばの定番。
山と川は深くつな
がっている。

山と川のつながりの深い西土佐。
森と海をつなぐ川。
7月が海の日、8月が山の日。
次は6月に「川の日」が制定され
てもいいはずだ。

カワ　カワ

椿谷　十川　江川　柳瀬　広瀬　半家　長生　鹿の巣　下方　西方　中家地　江川崎　目黒　大宮米　奥崎　藤が市　川崎　津野川　網代　舟母　藤川　堂ヶ森　岩間　津賀　遺跡　奥屋内　口屋内　坂本　弥陀野　大瑞　黒尊　美林谷　山財　下山山　大黒山　出井越　奥高野　天使の三角点　スリ ほいか坂